

今、被災地で求められる医療とは ～石巻市でのJMAT活動から見てきたこと～

新潟市医師会第2班

勝井丈美

はじめに

東日本大震災が起きて5週間目にあたる、4月17日から19日までの3日間、新潟市医師会チーム（総勢8人）として、私は石巻の避難所（住吉小学校と石巻市立女子高校）とグループホームで医療活動を行ってきた。津波被災が深刻な危険区域が含まれるエリア4は、兵庫県と新潟県の担当であった。現地で実際に活動してみて、エリア4を兵庫と新潟が担当することには意味があった。

当初問題視されたインフルエンザとノロウイルスの流行は鎮静化傾向だった。上気道炎や胃腸炎が大半で、あとは生活習慣病薬の継続投与や湿布薬希望など。避難所の被災者数は減少傾向で、患者数は一日で十数人と少なく、4月15日に日本看護協会派遣の保健師が避難所から撤退してからは、毎日巡回してくる岐阜大学の「心のケア」チームは手持ち無沙汰の状態。

忘れられた避難所（グループホームぐらんず）

小学校のすぐ裏手にある高齢者グループホームは、入所者16人に加えて別の介護施設の被災者16人（認知症）を収容していた。ホーム自体も津波被害にあい、避難途中で入所者と介護人合わせて4人が犠牲になった。ホームの看護師Sさん（60代）は自らも被災者でありながら不眠不休で頑張っており、まさしくハイテンション状態。行政の網の目から漏れていた小さな避難所に3日間、往診をして貴重な経験をした。新潟の笹団子と佐渡の海洋深層水20Lをもって我々が行った時、ホームは避難所とはみなされておらず、赤十字病院薬剤部は処方薬を配達できないと言った。そこを、チームの薬剤師が掛け合って配達してもらえることにした。尿取りパットが無い、あれが無い、これが無いと言われれば、チームの事務職は他の避難所で余っているのを調達して届けた。チーム

の精神保健福祉士は入所者やスタッフの話を聞いた。診療が終わるとS看護師は我々に自身のつらい津波体験を堰が切れたように話された。Sさんの思いを受け止めつつ、燃え尽きないように休息をとることを勧めた。お別れの日に入所者とスタッフたちがお礼だと言って、「北国の春」をSさんのハーモニカ伴奏で歌ってくださった。

足のオイルマッサージ

石巻市立女子高校の救護所での診療の合間に、私は看護師らと被災者の居室（和室の広い部屋だった）を訪問して、足のオイルマッサージをしてさしあげた。日中の居室には老人しかいない。一人10分程度、下腿だけであったが、マッサージを受けながら「家の中の物がみんな流されたんだよ」と話される人。マッサージが終わってから正座して、「着の身着のまま逃げてこの服しかないの」と語ってくれた人。中越沖地震被害のことを尋ねてくれる人。いずれの方々も決して暗い表情ではなく、穏やかで落ちついていていた。石巻の老人は若い時から、漁業や水産加工場などで体を使って働いてきた人が多く、また過去に厳しい経験もしているせいか、心の芯の強さが感じられた。案外、この老人は大丈夫だなと思えた。

全人的な医療

住吉小学校の救護所は2階の1年生の教室だった。被災者は1階の空き教室を居室として使用しておられた。隣にペットと飼い主用の居室も用意されていた。当初、住吉小学校の2階は土足のエリアだったが、我々より10日ほど前に行かれたK先生（中越沖地震の時の災害拠点病院院長）が廊下をきれいにお掃除されて、清潔エリアにして下さったそうだ。それを知って頭の下がる思いがした。

わずか3日間のJMAT活動ではあったが、外

3. 医療支援チームの報告

から現地に入っていく医療活動では何が大事かということ学んだ。震災から1か月以上経過すると、現地で求められるのは何でも診てくれて、この人なら話をしても大丈夫そうだなと思える、全人的医療のできる医療者だ。まず、被災者に受け入れてもらうことなくして実のあるサポートはできない。東北の被災者は淡々とした印象を受けるが、現地へ行ってみると津波被災は特別だと感じる。みな悲惨な体験をして心も傷を受けている。その傷に思いを寄せ、癒すには医療と物と心の3

つが必要だと感じた。

とても急ごしらえのチームとは思えないほどのチームワークの良さと、頼りない班長の私を支えてくださった7人のチームメイトに感謝申し上げます。また新潟市医師会事務局にも大変お世話になりました。

最後になりましたが、震災で亡くなられた方々へ哀悼の意を表し、被災地の一日も早い復興を祈ります。

